

令和7年度 第4回審議会の振り返り

— 令和7年度 第4回 飯田市これからの学校のあり方審議会 会議録概要

開催日時	令和8年3月25日(水) 19:00～21:25
開催会場	飯田市役所 C311～C313 会議室
出席者	審議会委員：後藤正幸、三浦弥生、會川百樹、原雅彦、玉置洋一、飯島政樹、 (敬称略) 松岡香代子、山浦貞一、村山雅也、勝野久美恵、下沢晃世 (オンライン)井出隆安 オブザーバー：北澤正光(飯田市教育長職務代理)
配布資料	1 次第 2 委員名簿 3 第3回審議会の振り返り 4 遠山郷学園における小学校の再編について 5 協議事項における Agenda 6 学校現場における教育活動の実態について
開会前の事務連絡	
1 開会 ・ 条例第7条第1項に基づき、後藤会長が議長となり開会 2 熊谷教育長あいさつ ・ 皆様こんばんは。年度末の大変お忙しい中お集まりいただきありがとうございます。季節は桜がちょうど見頃になる時期で、本来ならば夜桜も楽しみたいところですが、今夜は残念ながら雨でございますので、お足元の悪い中にお集まりいただいて誠にありがとうございます。 ・ 本日は今年度4回目の審議会ということですが、今月12日には、事前の勉強会にもご出席いただきましたことを改めて感謝申し上げます。ありがとうございます。 ・ 私事で恐縮ではございますけれども、教員になり、20歳そこそこで、最初に赴任した学校は1,300人を超える学校で、学年10クラス、1学級43人ぐらいの学校でした。そこで、当時は荒れる学校で、常に戦う生徒指導をしながら、こどもたちがする悪いことをどのように止めたらいいのかと、ずっとやっていたわけです。その後、20代後半になって赴任した学校は山間地の学校で、学年14人の生徒を担当させていただき、その次は6人の生徒を担当しまして、こどもたちと一緒に楽しく過ごさせていただきました。この学校規模のギャップに最初は不安も感じていましたが、それぞれに良さがありまして、小規模の学校では荒れることは少なく、一人一人の生徒に対して手が入り、こどもたちの様子もよくわかるという良さがございました。どちらがということは比較できないところですが、以前の自分の経験ですので、今の状況とは少し違うと思いますけれども、当時の山間地の小規模学校の課題は、表現力でした。大人数の人に向かって自分の考えを語れるようなことがなかなか苦手ではないかといったようなことがあり、表現力を身に付けていくために授業はどうすれば良いかということをよく研究していたと思います。 ・ また、確かに、こどもに合わせた授業ができる良い面がある一方で、私自身もそうでしたが、先生の人数が足りないのも、国語が専門ですが、非免許の体育や技術を持たせていただいていた。経験も無かったので、研修も積みながら同時並行で担当していたわけですが、自分としては専門の国語以上に体育や技術の授業も楽しくやっていたわけです。ただし、こどもたちにとってはどうだったのかということを、少し心配にもなったところでございます。 ・ いずれにしても、学校規模の比較はなかなか難しく、規模によって都合の良いところと都合の悪いところの両面があるということは実感として持っているところであります。 ・ 本日は、竜東学園長で、千代小学校長の曾我先生から、今現在の学校現場の様子をお聞きして、小規模の学校の良さや課題について、皆様にご協議いただくことになっております。本日はどうぞよろしくお願いいたします。 3 後藤会長あいさつ ・ 私からも一言ご挨拶させていただきます。最近の地元の自治会の回覧文書で、こどもたちがワクワクするような校長講話の文書が届きました。それには、全校児童に向けて新年度からいよいよ「みらい創造科」という学習が始まるという、こどもたちへの投げ掛けでございます。そこに登	

場してきた言葉は本当にいろいろありましたが、ずっと読み続けていって、私自身の気持ちを明るくさせてくれました。「自分とふるさとの未来を拓く」、「どうしてやってみたい」、「チャレンジ」、「ワクワク」、「ドキドキ」、「夢中になって」、最後は「七つのパワーを手に入れて」いこうという呼び掛けでございました。こどもたちの笑顔や楽しみな気持ちが想像されたところでございます。

- ・ 2年前、児童生徒一人一人の資質能力を伸ばすという視点から、小中一貫教育を推進する飯田学園構想の有効性を認めた第一次答申のことを同時に思い出しました。現在、第二次答申、第二次方針に向けて、今回は4つの論点について合意をし、その一つ目の論点、学校のあり方を検討する際の基本的な考え方、基本方針について、その具体的な4つのポイントを一つずつ確認、協議し、理解をしたところでございます。
- ・ 本日は、論点2、課題を共有するための課題の明確化について協議をいたします。今、お話がありました外は雨降りでございます。私たちも負けずに「フル」モードでまいりたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

4 報告事項

(1) 第3回審議会の振り返り

- ・ 事務局から「第3回審議会の振り返り」に基づき第3回審議会について報告

(2) 遠山郷学園における小学校の再編について

- ・ 事務局から「遠山郷学園における小学校の再編について」に基づき遠山郷学園内の小学校再編に関する進捗状況を報告

5 協議事項

(1) 論点2 課題を共有するための課題の明確化について

ア 上沼教育政策課長から資料に基づき、グループワークの実施方法等について説明

イ 竜東学園 曾我学園長から報告

- ・ 皆さんこんばんは。竜東学園長及び千代小学校長を務めております曾我佳伸と申します。よろしくお願いします。この審議会につきましては、昨年度、前千代小学校PTA会長が委員として参加されていまして、審議会後に必ずご報告をいただきまして、様々な審議が行われていることに驚いています。そして、これから皆さんが話し合いを行うことはすごいことだと感じています。飯田市のこどもたちのために熱心にご議論いただいていますことに本当に感謝いたします。ありがとうございます。
- ・ それでは発表に移りますので、資料をご覧ください。発表時間は30分間ということで、一般的なことは勉強会でご理解いただいているかと思いますので、実際に千代小学校、さらに竜東学園で現在どのような取組をしているかということをお話したいと思っております。
- ・ 今年度から学園構想がスタートしたということで、竜東学園としては本当に一年間努力してできることをやってきたとつもりであります。それは逆に言うと、努力しなくては小規模校の弱点を補い切れないため、施設分離型の中でできることをやってきたというわけでありました。小規模校の弱点を学園の取組で補ってきたという考え方です。
- ・ 「小規模校だから、よりできること」とありますが、この「より」の部分が大事だと考えていまして、大規模校でもできるけれど、小規模校の方が「より」できている内容です。竜東学園の一年間の取組がありますが、最近の出来事でいくつか具体事例をご紹介します。一つ目は手作りの卒業式で、卒業生一人一人をより温かく見送ることが出来ます。千代小学校の卒業証書授与の様子をお聞きください。

(令和7年度 竜東学園飯田市立千代小学校卒業式の卒業証書授与の音声)

- ・ 校長が卒業生一人一人に言葉を添えて卒業証書を渡すこと、その後、こどもたちから自然と拍手がされること、卒業生一人一人が自分の言葉で想いを語る時間を設けることができています。これは千代小学校だけではなく、竜東中学校でも卒業証書をもらった後に会場全体に向かって、中学校三年間の思い出やこれからの決意を述べてから壇上を降りるということをやっています。中学校の卒業式でこのような取組は初めて見ましたが、一人一人を大切にする場合、一人一人が認められる場になっていることが素晴らしいと思っています。
- ・ それから千代小学校では児童会企画として、児童会長が全校で一つになっての遊びを児童だけで全て企画し実施した様子が写真にもあるとおりです。先生たちは見守ったり、当日は一緒に児童会企画に参加したり等、児童主体で取り組みました。

- ・続いて、竜東学園内での新たな学びとして、お互いの学びの成果を還元することを目的に実施したことで、千代小学校4・5年生が縄文時代の竪穴式住居をつくろうと意見が挙がり、上久堅小学校4年生が北田遺跡に関する学習を行っていたことから、直接会って教わろうということで校外学習をしました。自分たちが学んだことを学園内の友達に伝えることもでき、互いの学習を深める機会となりました。
- ・竜東中学校の生徒が登校前に小学校へ寄って、竜東中学校で取り組んでいる花壇づくりについて説明をして、共に花を生かした学校づくり、地域づくりをしていこうと呼び掛けをしてくれました。そして、中学校から各教室で飾れるように花の苗が送られました。また、竜東中学校の生徒が農家民泊に関する学習を通してまとめた「民泊パンフレット」を作成したと聞いたので、竜東学園の3小学校で「ふるさと子ども夢学校」という農家民泊の体験学習に取り組んでいるため、ぜひ事前学習資料として活用させていただきたいと話をしたところ、竜東中学校の生徒がパンフレットを持ってきてくれました。
- ・こういった具体的な取組のとおり、小回りが利いて、柔軟な取組ができることが良さだと感じています。さらに、どこの学校でも体験的な学びを行っているが、小回りが利くからこそ、より地域の人や資源、学園内の児童生徒同士で、関わりの深い学習ができていると感じていて、そういったところも小規模校ならではの良さであると思っております。
- ・ここで資料にはない内容ですが、先ほど熊谷教育長からもありましたが、小規模校では表現力が弱点となりやすいということは、少人数の中での発表となるため、やはり当然のことでもあります。そういった弱点を補うことも考慮して、龍江小学校も含めた竜東学園内の小学校で人形劇公演会を2月に実施しました。さらに、人形劇場で行われる定期公演会にも自ら応募して発表しようという意欲があって、こどもたちから自主的に発表の機会を求めるようになってきています。そういったことも小規模校の柔軟な取組ができる良さだと思います。
- ・続いては、大人の感覚ではなく、実際に児童はどのように思っているかという点ですが、卒業間近の6年生が小学校のことを振り返る学習があり、そこで自身にどんな力が付いたのか、将来どのような方向に進んでいきたいか、小学校はどうだったか等、理由も含めて児童に直接聞いてみました。そうすると、例えば、「学校全員の名前を覚えて仲良くなることができた」、「色々な先生たちが応援してくれる」、「全校が一つのクラスのようになれるところが良い」、「人数が少ないので児童会活動も一人一人が頑張ることができていた」、「多くの先生に認めてもらえたり、活躍の場面がたくさんある」、「違う学校の人も含めて、友達と仲良くなれる」、「友達や先生、地域の人との関わりが多いこと」等、こどもたちからも多くのことが挙げられて、少人数でも良かったなということを感じました。
- ・続いて、複式学級の児童の想いとしては、千代小学校では4、5年生が複式だったのですが、「一緒にできることは楽しいし、別々であっても楽しめると思う」と率直に感想を言ってくれていて、複式学級だからマイナスになる面は一切なく、不満等も一切ありません。それはやはり学校運営の面で非常に努力しているため、こどもたちからマイナスの言葉が出てくることはないと思っています。実際にこどもたちからは、「教科によっては5、6年や3、4年で一緒になって勉強できることも良い」という声が上がっています。基本は4、5年が複式学級ですが、音楽や外国語、道徳、総合などは3、4年と5、6年というように教科担任制を敷いています。さらに、体育は合同でやったり、算数は別々にやったり等、4年生と5年生は教科によって変えています。そういった柔軟な組み合わせは良いことではあるけれど、授業の組み合わせが変則的になることは、先生方にとってはとても苦勞する部分ではあります。
- ・先生の一週間の時間割を見てみると、自分の学年ではなく、別の学年の図工を持ったり、時には1年生の音楽をやったり、5、6年生の外国語を持ったり等、教員も少人数の中で何とかカバーし合いながら、苦勞している現状があります。そういう実情において、裏返すとこどもたちにとってうまく回っていたり、頑張っている姿があるのは、実は学校運営上の苦勞はたくさんしているということでもあります。
- ・次の資料を見ていただくと、保護者がどう思っているのかというものであります。これは保護者の評価アンケートですが、記述の部分を全て掲載してありますが、他校との交流については非常に評価をしてくれています。それから、異学年交流や友達の名前、地域の方のお名前がたくさん出てくることが評価されています。また、上級生の関わりが助けになって励まされる、いいお手本になってくれているということも出されています。次のページは、教育活動全般についてですが、ダイレクトに複式学級のことが出されています。数年前までは複式学級が問題視されている雰囲気がありましたが、最近は徐々に肯定的に捉えてくれるよう

になってきています。余談ですが、複式学級ができてから5年目を迎えますが、最初は保護者から猛反対に合いました。千代の地域性からは信じられないことですが、昨年度までは「複式学級を考える会」ということもやって、複式学級の良さをみんなで勉強してきた経過もあるようです。私が赴任してからは要望がなくなり、そういう意味では先生方の努力があって、複式学級に対応した授業スタイルや方法を取り入れていっています。飯田市でお世話になっている東原先生にも何度かお越しいただいたり、さらにオンラインでもご指導いただいて、これからの目指す授業づくりを進めて取り組んでいます。

- ・ 続いて、竜東学園の取組に関してですが、合同で行事を実施することは当たり前になっていて、一番大事なのは日常化にすることだと考えています。そういった考えから、これまで以上にオンラインを含めた合同授業を増やしたり、竜東中学校の音楽の先生が乗り入れ授業で音楽指導に来てもらったりしています。ただし、教員も異動がありますので、乗り入れ授業もなかなか難しいこともあります。
- ・ そんな中で、竜東学園として一番力を入れたことは、少人数だからこそやりやすい「一人一人に合った学び」のある授業を目指すことをやっています。やはり小規模校だからこそ先生方も学園でまとまりやすく、これまでの一斉授業からの脱却をして、新しい当り前の授業をつくっていきこうという機運が高まっています。じっくり学びたい子や一人で学びたい子、先生と関わって、友達と関わって学びたい子など、自由進度学習のような学びの方法はもちろんですが、個に応じた学びを支えていこうと、竜東学園の研修会の中で発信をしました。先生方も当然、そのイメージを持ってきていました。
- ・ 次の資料は千栄小学校のことになりますが、千栄小学校も同様に、色々なスタイルで学んでいますということを紹介しています。その次の資料は上久堅小学校の資料ですが、上久堅小学校も一人一人に合った学びのスタイルに取り組んでいます。そういったことで、小規模校だからこそまとまりやすく、学園として一つの方角に向かっていきやすく、先生方も協力しやすいという利点があると思っています。
- ・ しかし、先ほども学校運営面では大変だと申しましたが、千栄小学校の資料に戻っていただきまして、千栄小学校は今年、2年生が3人、3年生が1人という状況で、3年生の女子児童は、保護者からも学年1人では悲しいということをおっしゃっていて、何とかしてほしいという思いは学校にも届いてきています。そういったことから、例えば資料にあるとおり、合同授業はもちろん行っていますが、それとは別に、国語の1単元を千代小学校とオンラインで繋いで一緒に学ぶということをしました。こういった現状がある中で、他学年の保護者からも、今は施設分離型で取り組んでいるけれど、学年1人の時に、卒業式や卒業アルバムが1人になってしまうということは現実的に考えられるのかなというお話もいただいています。現実ではそういった話になっていて、確かに本当にこの児童にとって、この先もこのままでいいのかなと考えることもあります。現状ではそれを学園で連携しながらカバーしているという状況になっています。
- ・ それでは、そろそろまとめとして、課題についてですが、小規模校の教育活動と学校運営の限界というところですが、先ほども申し上げたとおり、現時点でもう限界ぎりぎりですが、児童生徒や保護者から良い評価もいただけるような充実した教育活動、学習ができているかなと思っています。それでも千代小学校をとってみても、5年目の先生、2年目の先生がいて、教員としてのキャリアアップ研修で2人とも出張してしまい、校長も教頭も関係なく授業に入らなくては、その担任の先生が抜けたカバーができない状態になってしまいます。そもそも教頭先生も教科担任制なので、専門外ですが、4年生の理科の授業等を持っていたりします。さらには、先生が急に休んでしまうと、専科教員がいないため、誰も補助に入れる先生がいないう状況になってしまいます。そのため、校長か教頭が入って、カバーしていくしかないということになり、現場としては本当に厳しい状況ではあります。
- ・ そしてさらに、来年度は5、6年生が複式、1、2年生も複式ということになり、3、4年生は単独の学級ということにしようとしています。実は制度的には全学年単独の学級にすることは可能ですが、様々な事情があって、あえて複式を入れていく判断をしています。それこそPTA総会で保護者の皆さんに来年度の学級編成について、ご理解いただくため、工夫しながら進めていくことを説明しました。私、個人的には1、2年生の複式学級はとても厳しいという考えもあって、それは、5、6年生はこれまで積み上げてきた自分たちで学んでいくことの土台も徐々に出来てきているため、自ら学習する習慣がありますが、特に1年生はその力はまだまだ難しいので、本当にできるのかという不安はあります。

- ・そこで、今、できる工夫として考えているのは、国語と算数を常に1・2時間目に設定して、4月中は毎日、千栄小学校の児童が千代小学校に通って、1・2時間目は一緒に勉強するということできないか模索しています。どちらの小学校も1、2年生は複式学級なので、先生も二人になり、それぞれの学年で国語と算数の授業ができると考えています。これは両校の先生同士で話し合いもして、国語と算数以外であれば、複式や異学年と一緒にやっても問題ないことが多いですが、国語と算数だけはあまり複式には適していないということで、両小学校でそういった結論を出しました。ただし、移動をどうするかということが課題にあって、多くの予算があるわけではないので、そこで千代地区内に保育園やデイサービスを運営している社会福祉法人しゃくなげの会があるので、児童の送迎をお願いできないか相談しているところであります。相談した感触としては、前向きに捉えていただき、やってみようという話になっています。特に複式学級における学校運営面等、小規模校ならではの弱点はあるため、そこをカバーしようということを来年度も挑戦していければと考えています。
- ・最後に、小規模校における教育活動及び学校運営の限界について、学園内の先生何名かで考え、資料にある5点が挙げられたところです。これまでもお話ししてきたとおり、来年度も引き続き挑戦していく1年ではありますが、特に2つ目の複式学級でそれぞれの学年が1名だけの場合は、教育活動において非常に厳しいと思います。それから1、2年生が複式学級の場合も厳しいと思います。これは担任とは別にサポートの先生がいると問題はありますが、サポートの先生がいない場合、それなりに授業をこなすことはできますが、一人一人が確実に知識・理解の力を付けていくことを考えると、先生が授業をこなしていくだけでは難しいという点から、1、2年生の複式学級には限界があると感じています。さらに、サポートしてもらえない先生がなくて、複式学級が2つ、3つある場合も非常に厳しいと思います。
- ・そして5つ目として、今の時代にこういった考え方はあまりよくないとも思いますが、男女のバランスに大きな偏りがあるのも難しいと実感しています。千代小学校と千栄小学校でそれぞれ男子1名の学年、女子1名の学年があったりして、低学年のうちはあまり気にならなくても、だんだん学年が上がっていくと女子1名は厳しくなってくるだろうし、男子1名ももう少し力を発揮できるのではないかという思いが出てくる場面もあつたりします。今の時代、あまり男女区別はしないですが、それでも現場の感覚としては、男女バランスに偏りがあることも限界があるのではないかと感じております。
- ・これまで現場の実感としてお話をしてきましたが、苦しいことはたくさんありますが、それを補うために何とか工夫をしているところであります。しかしこれは工夫だけではどうしようもないこともあるので、やはりこの複式学級をどう考えていくかが重要になると思います。さらに言うと、現在は施設分離型で小中一貫教育を精一杯やっていますが、これからもどんどん児童数は減ってしまうので、もう限界はすぐそこにあるのではと感じています。そういった危機感から、竜東学園内の地域の中で、施設一体型への要望が出ている状況にあります。施設一体型については、小学校を一つにすることで、集団としての学びを充実させることに目が行きがちですが、それだけではなくて、中学生が持っている力を教育活動に生かしたり、小中学校のそれぞれの先生を一つのチームとして捉えて、教育力を上げていくことができるのではないかと、私たちとしては構想しているところであります。
- ・そういった想いも持ちながら、小規模校の良さと限界について、これまでの話のとおり、学校現場では考え、進めているところでございます。それでは、実践報告について終わりといたします。ありがとうございました。

ウ プループワークを実施

エ 井出委員の発言

- ・竜東学園から小規模校の良いところとデメリットについて報告がありました。本日の報告は、教育委員会が前回の勉強会で作成した文部科学省が捉える適正規模及び小規模校の良いところと課題の中に整理されているものと全て重なっています。報告が現状に則したもののため、よりリアリティのある内容になっていました。
- ・小規模校のデメリットを補う方法はこれまで多様な方法で試みてきているわけで、例えば、複式学級がそうですし、あるいは合同学習とか中学校等での教員の兼務や複数教科の担当など、いろいろな工夫ややりくりで補ってきました。また、近年の教育DXの進展、インターネットの飛躍的な発展によって、これまでできなかったことを補うことも可能になってきています。
- ・グループワークの中で出されていた指摘の中に、児童生徒が1人になってしまったらどうするのかという声があったのですが、人数が少なすぎて小規模のメリットがデメリットに変わ

るのは、どこの時点なのかということを見極めていく必要があるわけです。極端な例で、児童生徒が1人になったらどうするのか、男子が1人になったらどうするのかということは非常にわかりやすい例ではありますが、そこまで行く前にさまざまな課題が出てきているはずです。少人数になり過ぎて、メリットがデメリット化するポイントをどう捉えていくのかという議論を今後進めていくと、もっとわかりやすい方向性が見えてくるだろうと思います。

- ・また、学校に児童生徒が集まり、一緒に勉強するということは一体どういうことを意味しているのかを考える必要があります。少し前の資料になりますが、令和4年1月にデジタル庁と総務省、文部科学省、経済産業省の共管で、デジタル社会を見据えた教育と教師の役割という報告がされたのですが、その中に学校で学ぶ意義について触れている部分があります。少し引用しますと、児童生徒が学校で集うことでしかできない学び、児童生徒同士あるいは教師と児童生徒が人間的な関わりを通して学ぶことと指摘しています。学校に集まってこども同士、先生とこどものいろいろな関係の中で学んでいくことを考えた時に、それに相応しい規模、つまりボリュームがどの程度あったら良いのかということを検討しなくてはなりません。学校が無くても学ぶことはでき、少なければ少ないなりにさまざまな方法で学びを支えていくことは可能ですが、学校という器に集まり、みんなで一緒に勉強するということの持っている意味や意義を捉え、それを生かすために必要な規模はどの程度なのかということ、本日の議論の中で恐らく答えが出てきたのではないかと思います。

オ 各グループ発表

(Aグループ 後藤会長)

- ・小規模であることの良さが多く出され、線でつながっているのは関係している意見を繋げてあります。小規模の良さは十分に理解でき、また、同時に課題があることもよくわかりました。具体的な意見としては、教師のやりがい良さとなっている反面、やりがいだけでは続かないといったことが課題としても出てきています。また、家族のような雰囲気、あるいはこども一人一人の名前も顔もわかって、安心して過ごせるというような良さもある反面、人間関係の固定化、一人一人が浮き彫りになって逃げ場がないというような課題も挙がっています。以上のように、良さも課題も両方あることから何がみえてくるかというと、児童生徒数と教職員数がキーワードとして挙がり、それが保護者・PTAへの負担にもつながっているということで出てきました。具体的には一人当たりにかかるお金の面やPTA活動の問題等が挙げられました。
- ・続いて2回目のグループワークでは、小規模の良さはあるが、少人数であれば少ないほどいいのかということではなく、その限界はどこかという話し合いになり、一つは複式学級がある状態のことが限界ではないかと出てきました。もう一つは、現在小学校では19校のうち13校が小規模校であるということを踏まえると、学校生活において望ましい集団活動ができるのか、要するに望ましい集団活動として学級活動、学級生活、学校生活ができているのかが話題になりました。それぞれの理由は下段に書かれている内容ですので、ご覧いただければと思います。

(Bグループ 三浦副会長)

- ・小規模であることの強みの児童の学びの視点では、個別で目が行き届きやすいこと、自ら主体的に学び、様々な場面で活躍できる機会が多いことから責任感が身に付くという良さがあり、また、小規模のため学年を超えた活動が盛んに行うことができ、集団としての絆が生まれるという意見が出されました。一方、課題面で捉えると、こどもたちが気を抜けない状況になってしまうこと、多様な考えに出会えないのではないかと意見が出されました。また、同年代同学年の仲間との触れ合いが希薄になること、人間関係の固定化も起こってしまうということが出ました。
- ・続いて、教育活動や学校運営の視点では、児童生徒がやりたいということに寄り添うことができること、小回りが利くこと、一人一人目が行き届きやすいことが出されました。課題としては、多岐にわたる業務があり先生方への負担が大きいこと、PTAへの負担もかかってくるため、地域の協力が必須であるということが課題の一つとして挙げられています。
- ・2回目のグループワークでは、小規模な教育の良さが得られなくなる状態については、学校は児童生徒の社会生活があり、社会性を育む場でもあることから、児童生徒の社会性が育まれなくなる状態では、その良さを得られなくなってしまうのではないかと意見が出されました。理由としましては、児童の学びの観点からは、同年の仲間、さらに同性の仲間がいいることが精神活動の発達段階において、同年齢・同性など社会の中に当たり前にある集団すらも築けないバランスの悪さによって、社会性が育まれなくなる状態になってしまうのでは

ないかと考えました。また、学びの範囲が制約されてしまうことも影響があるのではないかと考えました。

- ・教育活動や学校運営の観点では、PTA組織や地域で支えていただける方々の協力体制の維持が困難になってしまうのではないかと考えました。地域の中では高齢化や人数の減少が危惧されるため、こどもたちの学びの体制を支えることが難しくなってしまうのではないかと意見が出ました。

(Cグループ 山浦委員)

- ・児童の学びの視点からの強みについては、キーワードは「個別」、「一人一人」、「ふるさと学習」や「体験的な学習」が出てきました。そのキーワードから導かれる強みはというと、自律的な学び、その子らしい学び、個性的な学び等ができることが強みとしてあります。
- ・続いて学校運営の観点では、小回りが利く、きめ細かな学習支援ができる、学校はチームになるというようなキーワードが出てきました。そのキーワードから導かれる強みはというと、個性や多様性に応じた柔軟な学習環境を整えることができるということ、また、小規模教育の強みの教育理念や教育方法ができるということが強みとして挙げられました。
- ・弱みの方では、人間関係の固定化、評価の固定化、リーダーの存在等が挙げられ、もっと成長できるのに、その成長が困難な状態になってしまうのではないかとということが挙げられました。それから学校運営については、教員数が少なくなるため教員の負担が重くなること、あるいは教員個人の力量への依存度が高くなってしまいうことが挙げられました。また、地域の学校への協力が学校運営に欠かせないため、学校と地域の連携から協働への移行ができなければ、学校運営に支障をきたしてしまうという意見が出ました。
- ・2回目のグループワークでは、児童の学びの観点においては、さまざまな機会が無くなったり、競争心が無くなる等、徐々に活動量が限定されていってしまうイメージになって、なおかつ、こどもたちの場合は教室や学校が学習の場だけではなく、生活の場でもあるため、その生活の場の中で身に付けられるものが育ちにくい場合は、限度としてあるのではないかと考えました。
- ・学校運営の観点から考えると、地域と学校の関係性がとても大事になってくるため、その地域がさまざまな要因から元気がなくなってしまった時には、限度ではないかというような意見がありました。
- ・以上から、一つは地域からの協力が無くなった場合、いわゆる学校と地域の連携や協働の継続性の担保ができなくなってしまうということがあります。もう一つは、学校側で工夫している小規模教育の学びの環境が、その多様な学びの環境が整えられない場合には、限度ではないかという状況が挙げられました。

6 連絡事項

7 閉会挨拶 三浦副会長

- ・委員の皆様大変お疲れ様でした。飯田市のこどもたちの笑顔や困った顔などを思い浮かべながら、頭も心もフル回転で話し合いをしていただいたのではないかと思います。井出委員からもありましたが、「学校という場所は人間的な関わりを通して学び合うところである」とのとおり、知識だけを得る場所ではなく、こどもたちが人との関わりを通して多くのことを学んでいるところであります。そう考えると、小規模の限界は、そのことが可能でなくなった時なのではないかと改めて考えさせられるグループワークの時間でした。
- ・それでは以上をもちまして、令和7年度 第4回飯田市これからの学校のあり方審議会を終了させていただきます。本日はありがとうございました。